

ブルゴーニュ地方モルヴァンにおける CA-, -CCA, PL-, BL-を語源に持つ語について

伊藤玲子

0. はじめに

北フランス南東部にあるブルゴーニュ地方のほぼ中央に、モルヴァンと呼ばれる地域がある。東西約 60km×南北約 100km に広がり、中央南部は標高 902m に達し (Régnier 1979b : 1)、ドイツやスイスとの国境付近の山脈を除けば、モルヴァンは北フランス東部において標高が高い地域である。森に覆われ、ヨンヌ川支流やローヌ川支流の水源を有し、池が点在するこの地域は、1970 年に「モルヴァン地方自然公園」に指定されているが¹⁾、地形的な理由から 19 世紀初頭によく幹線道路が敷設されるまでは、ローマ時代以来の道しかなかったという (Régnier 1979a : 27-28)。



図 1 ブルゴーニュ地方²⁾モルヴァンは行政上また宗教的にも 1 つの共同体として治められていたことはなく、常に隣接する周辺地域の管理下にあり (Richard : 153, 291)、この地域の話しことばはモルヴァン方言と呼ばれる。

1. 先行研究

1.1. Taverdet (1973)

ブルゴーニュ大学名誉教授の Taverdet は、1960 年代に調査された『ブルゴーニュ地方言語民族誌地図集』*Atlas linguistique et ethnographique de Bourgogne (ALB)* (Taverdet 1975, 1977, 1980) のデータに基づいて、ブルゴーニュ地方における俚言の使用状況や言語的特徴を分析した。俚言は当時ほとんどの地域では廃れていたが、モルヴァンと南東部のプレスでは生き活きと話されていたとされ (Taverdet 1973 : 320-325)、この 2 地域の 60 歳以上の住民にとっては俚言は母語であった³⁾。

Taverdet (1973 : 322) によると、モルヴァンは言語学的に、特に語彙と形態が保守的である。また特有の音声変化がみられる。例えばフランス語⁴⁾では [r] > [z] > φ と音声変化するが、モルヴァンでは一貫してはいないものの [r] > [z] > φ > [r] というように [r] が復活する。また、[z] > [j] や [s] > [ʃ] という強い口蓋化が起きる。例を挙げると、「家」*maison* (フランス語 : [mɛzõ]⁵⁾) は [ma:ʃjõ] と発音される。

1.2. Régnier (1979a, 1979b), Bertrant (1979)

1982 年までパリ第 4 大学の教授を務めた Régnier は、1914 年にモルヴァンに程近い村で生まれ、幼少時は俚言で話していたという。彼は 1948-1962 年に現地調査を行ってモルヴァンの言語地図 (Régnier 1979b) を作成し、音声・形態・語彙について分析した (Régnier 1979a)。また Bertrant (1979) は、

Régnier (1979b) の音声表記をフランス語の伝統的な綴り字に書き換えて、県別にまとめたものである。以上 3 冊は *Les Parlers du Morvan I, II, III* 『モルヴァンの話しことば I, II, III』を構成している。Régnier (1979a: 133-134) はモルヴァンの話しことばについて以下のように述べている：① 1 つの俚言が存在しているのではない。② 言語学的に多様性と保守性の二つの側面を持つ。③ ブルゴーニュ地方の特徴である口蓋化や唇音化がみられる。④ ニヴェルネ地方⁶⁾ 特有の母音間の子音、特に r の弱化や非鼻母音化がみられる。⑤ ブルゴーニュ地方の影響はニヴェルネ地方の影響より強いが、影響の程度は語によって異なる。⑥ フランコ＝プロヴァンス語と共通点がある。また、Régnier (1979a: 86) は、[z] > [r] の音声変化が見られるという。さらに Régnier (1979a: 185-186) は、モルヴァンは政治的にも宗教的にも統一していたことがなかったことから、語は地域によって別々に育まれたと主張する。

1.3. モルヴァンにおける [s] の言語島

Dauzat (1922: 224-231) によると、俗ラテン語の a の前の c は、北フランスにおいて 2 つの型に口蓋化した。一方は、パリやオルレアン付近で始まった $c(a) > tch > ch$ の変化で、20 世紀初頭の北フランス、フランス中央部及びフランコ＝プロヴァンス地方で ch がみられた。もう一方は $c(a) > ts$ の変化で、20 世紀初頭のリムーザン方言、オーヴェルニュ方言、フランコ＝プロヴァンス語などの諸俚言に保存されていた。さらに $ts > st$ あるいは s と変化した地域があり、20 世紀初頭のモルヴァンでは s の言語島が存在し、そこでは「雌牛」(フランス語: *vache*[vaʃ]) は *vas* と発音されていた。ブルゴーニュ地方北東部に隣接するアルデンヌ県やマルス県でも s が残存することから、かつては ts がブルゴーニュ地方とシャンパーニュ地方のほぼ全域に分布していた。

2. リサーチクエスション

伊藤 (2020) は、20 世紀中期のモルヴァンにおける同じ語源を持つ語について音声特徴の分析を試みているが、より広い範囲での考察が必要であると考えた。モルヴァンとその周辺地域において同一語源を持つ語を言語地理学的に考察した先行研究はないことから、本研究では 20 世紀中期のモルヴァン及び周辺地域における音声特徴について、以下のリサーチクエスションを立てた。

- ① モルヴァンでは同じ語源を持つ語が同じ音声変化を経たか？
- ② モルヴァンとその周辺地域において、同じ語源を持つ語は言語地理学的な特徴があるか？

3. 方法

3.1. コーパス

モルヴァンのコーパスとして、先行研究で言及した 2 つの言語地図を使用する。

- Taverdet (1975, 1977, 1980) (以下 *ALB*)、『ブルゴーニュ地方言語民族誌地図集』、地図 1,800 枚

- Régnier (1979b) (以下 *PM*)、『モルヴァンの話しことば』、地図 498 枚

両言語地図は共に 20 世紀中期に調査され、中高年の農民がインフォーマントである。

さらに、周辺地域との関連性を観察するために以下の言語地図を使用する。

- 『フランス言語地図』 *Atlas Linguistique de la France* (以下 *ALF*)⁷⁾、地図 1,920 枚

ALF は上記 2 言語地図より約半世紀前に調査されたが、全体を俯瞰的に考察するために *ALF* を参照することは有益である。

3.2. 分析対象地点

モルヴァンの分析では、*ALB* と *PM* で共通して調査されていた 10 地点を分析対象とする。図 2 の左図における点線は一般的にモルヴァンと呼ばれる地域を示す。内側の長方形は *PM* の調査範囲を表し、以降はこの長方形の範囲をモルヴァンと呼ぶこととする。モルヴァンの標高は最高 902 メートル (地点 9 付近)、山地の周囲は標高 300 メートルほどである (Taverdet 1975: IV)。

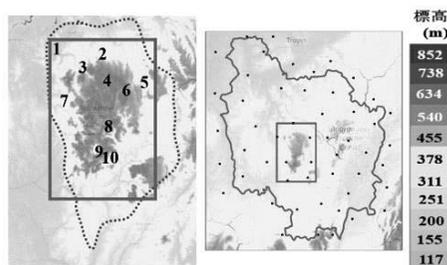


図 2 分析対象地点⁸⁾

周辺地域との関連性についての分析では、*ALF* のブルゴーニュ地方 (31 地点) とその周辺 (22 地点) を分析対象とした。図 2 の右図における外側の曲線はブルゴーニュ地方を、中央の長方形はモルヴァンを、“・” は分析対象地点を表している。

3.3. 分析対象語

分析対象語		地図番号			
		<i>PM</i>	<i>ALB</i>	<i>ALF</i>	
語源	フランス語形				
C(A)-	ラテン語 CATHĒDRA	chaise 「椅子」	375	1419	222
	ラテン語 CARRU(M)	char 「4 輪荷車」	93	1268	235
	ガリア語 ⁹⁾ CAMMĪNU(M)	chemin 「道」	15	238	262
-CC(A)	ラテン語 VACCA	vache 「雌牛」	239	1026	1349B
	ラテン語 BŪCCA	bouche 「口」	432	1330	151
PL-	ラテン語 PLŪVIA	pluie 「雨」	423	35	1039
	ラテン語 PLŪMA	plume 「羽、羽毛」	288	1187	1040
BL-	ゲルマン語 *BLANK	blanche 「白い (女性形)」	240	867	135
	古フランク語 *BLĀD	blé 「小麦」	171	389	136

表 1 分析対象語

同じ語源を持ち、且つ、フランス語形が3つの言語地図で調査されている語を探した結果、語源 C(A)-、-CC(A)、PL-、BL-をもつ9語を分析対象と決定した (cf. 表 1)。9語を選ぶにあたり、データの欠如が少ない地図を選んだ。語源は『フランス語語源辞典』*Französisches Etymologisches Wörterbuch. Eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes (FEW)* を参照した¹⁰⁾。

3.4. 分析手順

まず語源からフランス語に至る音声変化を参照する。次に1地点に *ALB* と *PM* のデータを併記したモルヴァンの地図を分析して、モルヴァンの音声特徴を考察する。続いて *ALF* のデータから作成した周辺地域の地図を分析して周辺地域との関連性を考察する。言語地図にフランス語形とは異なる語を表す音声表記が記載されている地点は、分析から除外する。

4. 分析

4.1. C(A)-

4.1.1. CATHĒDRA

Zink (1991 : 200) によれば、CATHĒDRA からフランス語 *chaise* に次のように変化した。ラテン語 CATHĒDRA > … > 5世紀 [kʰadiedra] > [ʧadiedra] > … > 13世紀 [ʧajerə] > 近代フランス語 *chaire* > *chaise*[ʧe:z]。ALB と PM には、[ʧe:z]、[ʧez]、[ʧe:r]、[ʧe:l]、[ʧe:]、[se:l]、[se:]、[ʧe:z]が記載されていた。分析対象外であるが、語末子音に次のようなバリエーションがみられた。①[ʧe:r]の[r]は、近代フランス語 *chaire* の痕跡か、[r] > [z] > ϕ > [r]と[r]が復活したか (Taverdet 1973 : 322)、あるいは[z] > [r] (Régnier 1979a : 86) の結果であろう。②[ʧe:l]、[se:l]、[se:]は、[r]と[l]の混同 (Régnier 1979a : 88) が起きている。③[ʧe:]と[se:]はフランス語でみられる[r] > [z] > ϕ (Taverdet 1973 : 322) の例と思われる。

4.1.2. CARRU(M)

Zink (1991 : 116) によれば、CARRU(M) からフランス語 *char* へ次のように音声変化した。ラテン語 CARRU(M) > 5世紀 [kʰarru] > [ʧarro] > 7世紀 [tʧar] > 13世紀 [ʧar] > 17世紀 [ʧar]。ALB と PM には、[ʧær]、[ʧe:r]、[ʧɛr]、[ʧjɛr]、[ʧejo]、[sar]、[sja:r]、[sjar]、[sja:r]、[se:r]、[ʧe:r]、[sa:rɔt]、[sejo]が記載されていた。[sejo] (ALB 及び PM: 地点 1、3、PM: 地点 7) と[ʧejo] (ALB: 地点 7) の第2音節の[j]は、[r] > [j] (Régnier 1979a : 84) の結果と考える。

4.1.3. CAMMĪNU(M)

Zink (1986 : 117) によれば、ガリア語 CAMMĪNU(M) からフランス語 *chemin*[ʧəmɛ̃] に至る過程

で、CA- は次のように音声変化した。5 世紀 [kia] > [tʃe] > 7 世紀 [tʃe] > 11 世紀[tʃə] > 13 世紀 [ʃə]。
ALB と *PM* には、[ʃmē], [ʃmēɲ], [ʃmi], [smē], [smi], [smēɲ]が記載されていた。Régnier (1979a: 131) は[ʃmi]や[smi]の母音について、モルヴァンでは開口度が狭い鼻母音 ([ɪ̃]など) は不安定で、開口度が広がるか非鼻母音化する、と説明している。

4.1.4. モルヴァンにおける語源に C(A)-を持つ語

図 3 において、▲[s]と○[ʃ]の分布は 3 語で完全には一致していないものの、▲[s]が標高の高い地域から北西部に分布し、○[ʃ]が周囲に分布していることが共通している。

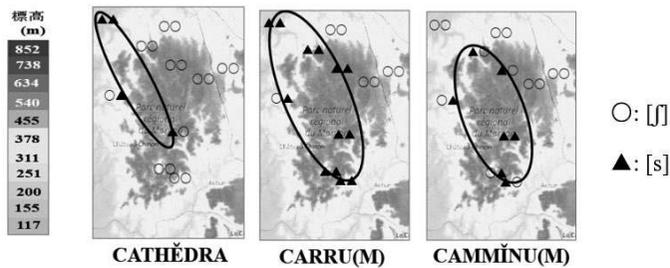


図 3 モルヴァンにおける語源に C(A)-を持つ語

4.1.5. 周辺地域における語源に C(A)-を持つ語

図 4 において、CATHÉDRA と CARRU(M) ではモルヴァン西部と南部に▲[s]がみられる。CAMMĪNU(M) では、モルヴァン西部の▲[s]はブルゴーニュ地方南東部の★[ts]や▲[s]と連続している。いずれの語でも○[ʃ]が周辺地域と連続して広く分布し、モルヴァン南西部に▲[s]が分布しているが、その分布範囲は語によってことなっている。また▲[s]は、モルヴァン西部とフランコ=プロヴァンス語圏であるブルゴーニュ地方南東周縁部に共通してみられる。

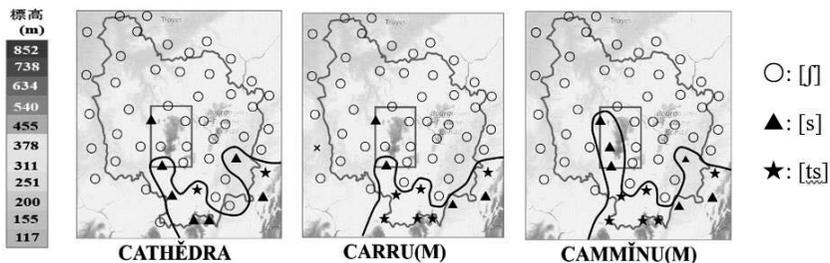


図 4 周辺地域における語源に C(A)-を持つ語

4.2. -CC(A)

4.2.1. VACCA

Zink (1991:116) によれば、VACCA からフランス語 *vache* に、次のように音声変化した。ラテン語 VACCA > 5 世紀 [vakkia] > [vattia] > 6 世紀 [vatfja] > 7 世紀 [vatfə] > 13 世紀 [vajə] > [vaj]。ALB と PM には[veʃ]あるいは[ves]のどちらかが記載されていた。

4.2.2. BŪCCA

Fouché (1969:232) によれば、BŪCCA からフランス語 *bouche* に、ラテン語 BŪCCA > 古仏語 [bofe] > [buf]と音声変化した。ALB と PM には[buf]、[bus]、[bys]、[bwes]、[bwis]が記載されていた。

4.2.3. モルヴァン及び周辺地域における語源に-CC(A)を持つ語

モルヴァンの北西から南東にかけて、▲[s]と○[ʃ]の境界が存在する (cf. 図 5 の左図¹¹⁾)。図 5 の右図で広域に観察すると、VACCA では Dauzat (1922:224-231) の指摘どおりモルヴァンに▲[s]の言語島が存在し、一方でブルゴーニュ地方南東周縁部に★[ts]や▲[s]が分布している。また BŪCCA では、モルヴァンの▲[s]とブルゴーニュ地方南部の★[ts]が連続して、言語島を形成している。

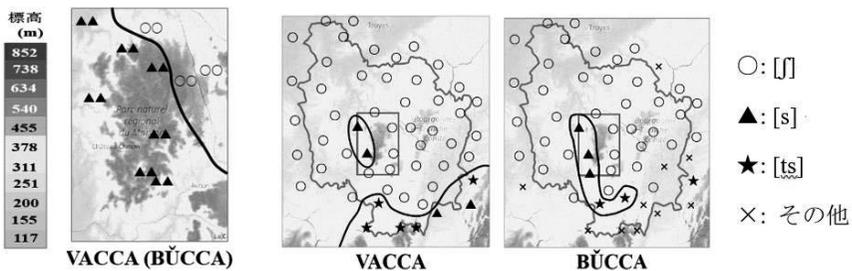


図 5 語源に-CC(A)を持つ語 (左:モルヴァン、右:周辺地域)

4.3. PL- / BL-

4.3.1. PLŪVIA

Fouché (1966 : 684) によれば、PLŪVIA からフランス語 *pluie* に、ラテン語 PLŪVIA > *pluia > [plɥi]と音声変化した。ALB と PM には、[plø]、[plø:]、[pjø:]、[pɥi:] (PM : 地点 7) が記載されていた。

4.3.2. PLŪMA

Fouché (1966 : 684) によれば、PLŪMA からフランス語 *plume* に、ラテン語 PLŪMA > [plum]と音声変化した。ALB と PM には、[pløm]、[plœm]、[plœm]、[pjœm] が記載されていた。

4.3.3. *BLĀD

Fouché (1966 : 683) によれば、*BLĀD からフランス語 *blé* には、古フランク語 *BLĀD > *bladu

>[ble]と変化した。*ALB* と *PM* には、*BLĀD から変化した [ble]、[blɛ]、[bje]、[bjɛ] (*PM* 及び *ALB* : 地点 1-7) と、[fromā]、[frɔmā]、[frōmā]、[frumā] (*ALB* 及び *PM* : 地点 8、9、10) が記載されていた。後者は、モルヴァンやブルゴーニュ地方南東部で blé の意味で使われる froment を表し (Taverdet et Navette-Taverdet 1991:77)、その語源はラテン語 FRUMENTU(M) で *BLĀD とは異なることから、*ALB* と *PM* の地点 8、9、10 は分析から除外する¹²⁾。

4.3.4. *BLANK

Fouché (1966 : 683) によれば、*BLANK からフランス語 blanc (男性形) に次のように音声変化した。ゲルマン語 *BLANK > *blancu > blanc [blā]。フランス語の女性形 blanche の語頭子音群はこれに準ずる。*ALB* と *PM* には、[blāj]、[blēj]、[bjāj]、[bjās]、[bjēs:s]、[bjēs] が記載されていた。

4.3.5. モルヴァンにおける語源に PL-/BL-を持つ語

4 語において ▲[pj]/[bj] が広く分布し、○[pl]/[bl] が北部にみられる (cf. 図 6)。PL-/BL- を語源に持つ語はほぼ同じ地域で口蓋化しているが、語頭子音 [p] と [b] がどちらも両唇破裂音で、調音点と調音方法が同じことがその理由であろう。また、PLŮVIA の西部で ★[p] がわずかにみられる。

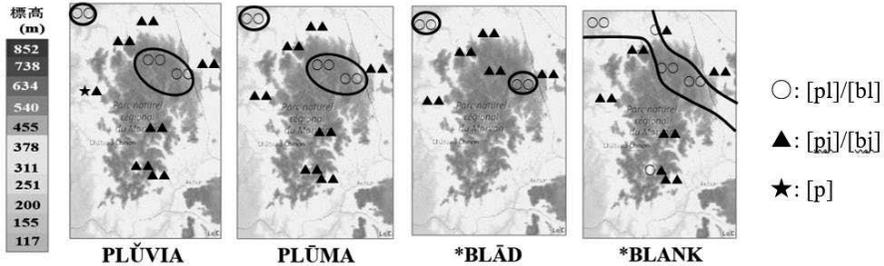


図 6 モルヴァンにおける語源に PL-, BL-を持つ語

4.3.6. 周辺地域における語源に PL-/BL-を持つ語

サントル地方、イル＝ド＝フランス地方、シャンパーニュ地方西部からブルゴーニュ地方西部に連続する ○[pl]/[bl] と、シャンパーニュ地方東部からブルゴーニュ地方東部に続く口蓋化した ▲[pj]/[bj] の境界が、モルヴァン付近で複雑に入り組んでいる (cf. 図 7)。境界線は語によって異なるが、いずれの語でも ▲[pj]/[bj] がモルヴァン南部とブルゴーニュ地方東部にみられ、○[pl]/[bl] がモルヴァンの山地を迂回するように東進している。PLŮVIA と *BLANK ではモルヴァンに ▲[pj]/[bj] の言語島が形成され、PLŪMA と *BLĀD では ▲[pj]/[bj] がモルヴァン南部からブルゴーニュ地方東部に連続している。以上のことから、○[pl]/[bl] の東進に対して、特にモルヴァン南部周辺で ▲[pj]/[bj] が抵抗していたことがわかる。また PLŮVIA で ★[p] がモルヴァンより東には及んでいないことから、西部からの侵入に対

してモルヴァンで抵抗があったことが示唆される。

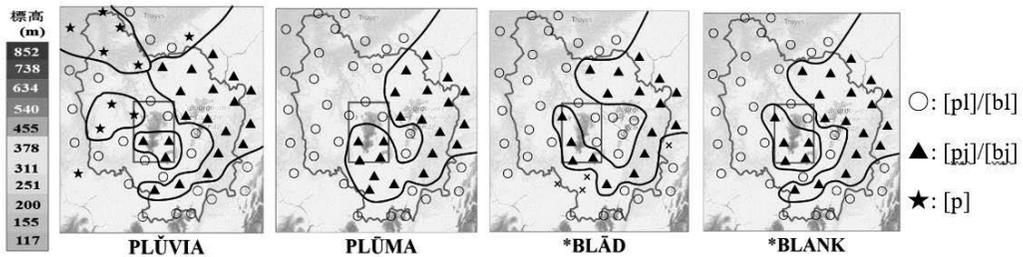


図7 周辺地域における語源に PL-, BL-を持つ語

5. 結論

20世紀中期のモルヴァンにおける音声特徴を分析するにあたり、次の2つのリサーチクエスションについて検討した：①モルヴァンでは、同じ語源を持つ語が同じ音声変化を経たか？ ②モルヴァンとその周辺地域において、同じ語源を持つ語は言語地理学的な特徴があるか？ 先ず①について、20世紀中期において C(A)-、-CC(A)、PL-、BL- を語源に持つ語は、モルヴァン全域では同一の音声変化を経ていなかった。すなわち、モルヴァンは音声的に均一ではなかった。次に②について、C(A)-/-CC(A) を語源に持つ語において、[j]が周辺地域と連続して広く分布していた一方で、モルヴァンの山地付近に[s]の言語島が形成されたり、あるいはブルゴーニュ地方南東部の[s]や[ts]と連続していた。これは、かつてブルゴーニュ地方一帯に[ts]が広がっていたという Dausat (1922 : 224-231) の主張と、モルヴァンの話しことばはフランコ＝プロヴァンス語と共通点があるという Régnier (1979a : 133-134) の主張を裏付けるものである。また PL- / BL- を語源に持つ語が口蓋化する地域がほぼ同じだったことは、音声学的な理由によると考える。ブルゴーニュ地方西側から連続する[p]/[b]と、ブルゴーニュ地方東部から続く[pi]/[bi]の境界が、モルヴァンで複雑に入り組んでいるが、これは[p][b]の東進に対してモルヴァンで[pi][bi]が抵抗していたことを表している。

本研究で、モルヴァンには1つの俚言が存在しているのではないとする Régnier (1979a : 133-134) の主張を確かめることができた。Régnier (1979a : 133-134) はモルヴァンにおけるブルゴーニュ地方の影響はニヴェルネ地方の影響より強いが、影響の程度は語によって異なると述べているが、本研究によって、モルヴァン北部にはニヴェルネ方言の影響が、モルヴァン南部にはブルゴーニュ方言の影響がみられるが、それぞれの影響を受けていた地域は語によって異なっていたことがわかった。モルヴァンの山地に古い形やブルゴーニュ方言が残っていたことと、モルヴァン付近で方言境界が入り組むことには、関連性があるように見える。Dausat (1922 : 205) は、地理的条件が言語変化に影響することについて以下のように述べている。「言語潮流が地理的または社会的障壁に衝突する場合には、挫けることもあり、またしばしばその周囲を迂回して進行することもあり、また時としては、多少障壁をのりこえることもある。」以上のことから、山地という地理的特徴によってモルヴァンにおける音声的多様性と保守性が生れたと考える。さらに、Régnier (1979a : 185-186) はモルヴァンで

は語は地域によって別々に育まれたと述べている。しかし、音声に関しては、モルヴァンの各地域で別々に育まれたと言うより、常に周辺地域との関連でそれぞれの地域で変化が進行したと言えるのではないか。

今後は、20 世紀中期のブルゴーニュ地方における人称主語代名詞と動詞の活用形態について言語地理学的分析を行い、モルヴァン方言の言語学的考察を深めていきたい。

註

- 1) <https://www.parcs-naturels-regionaux.fr/article/histoire> (最終閲覧日 2019 年 7 月 26 日)
- 2) [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Carte_de_la_Bourgogne_\(Relief\).svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Carte_de_la_Bourgogne_(Relief).svg) (最終閲覧日 2019 年 8 月 25 日)
- 3) Taverdet (1975, 1977, 1980) 及び Régnier (1979b) 以降、モルヴァンの話しことばについての調査は行われておらず、21 世紀初頭の現在において俚言話者が存在するかについては明らかではない。
- 4) 本論文における「フランス語」は「標準フランス語」を指す。
- 5) フランス語の発音表記は大賀ほか (1988: 2485) を参照した。
- 6) パリ盆地の南東縁辺部にある旧州。ブルゴーニュ地方南西部のニエーヴル県と北西部ヨヌス県、サントル＝ヴァル・ド・ロワール地方東部シェール県の一部に相当する (cf. 大賀ほか 1988: 1646)。
- 7) 1900 年頃にフランス本土のロマンス語地域で調査された。本研究ではオンライン版を参照した (cf. 参考文献)。
- 8) 分析で用いた地図は、以下のカラー画像をグレースケールに変換したものである。
<https://fr-fr.topographic-map.com/maps/6/France-métropolitaine/> (最終閲覧日 2021 年 4 月 13 日)
- 9) ガリア語とは大陸ケルト語の 1 つで、5 世紀頃に死滅したとされる (cf. 大賀ほか 1988 : 1129)。
- 10) オンライン版を参照した (cf. 参考文献)。
- 11) 図 5 は VACCA の図である。BÛCCA については、ALB1330 : bouche の地点 2、5、6 のデータが欠如しているが、それ以外は VACCA と同様である。
- 12) 発表では地点 8、9、10 を ALB0602 : blet 「(果物が) 熟れすぎた」(語源 : 古フランク語 *BLETTIAN) の同地点のデータで補ったが、本論文ではデータ欠如のまま分析した。

参考文献

- BERTRANT, Paule.(1979). *Les parlers du Morvan III, Transcription des forms en orthographe française*.
Château-Chinon :Académie du Morvan.
- DAUZAT, Albert.(1922). *La géographie linguistique*, Paris : Libraire ERNEST, 『フランス言語地理学』、松原秀治、横山紀伊子訳 (東京 : 大学書林, 1958 年).
- DE CHAMBURE, Eugène. (1878). *Glossaire du Morvan;étude sur le langage de cette contrée comparé avec les*

- principaux dialectes ou patois de la France, de la Belgique wallonne, et de la Suisse romande*, Paris : H.CHAMPION, LIBRAIRE, Autun:DEJUSSIEU PÈRE ET FILS.
- FOUCHÉ, Pierre. (1966). *Phonétique historique du français, Volume III, Les consonnes et index général, 2e éd., rev. et corrigée*. Paris : Klincksieck.
- FOUCHÉ, Pierre. (1969). *Phonétique historique du français, Volume II, Les voyelles, 2e éd., rev. et corrigée*. Paris : Klincksieck.
- LÉONARD, Monique. (1999). *Exercices de Phonétique Historique*, Paris : Éditions Nathan.
- POPE, Mildred Katharine. (1952). *From Latin to modern French with especial consideration of Anglo-Norman : phonology and morphology*, Manchester : Manchester University Press.
- REGNIER, Claude.(1979a). *Les Parlers du Morvan I*, Château-Chinon : Académie du Morvan.
- REGNIER, Claude.(1979b). *Les Parlers du Morvan II*, Château-Chinon : Académie du Morvan.
- TAVERDET, Gérard.(1973). Patois et français régional en Bourgogne, *Ethonologie français 3,3-4. 1973*, Paris : Centre d'ethnologie française.
- TAVERDET, Gérard.(1975). *Atlas Linguistique et ethnographique de la Bourgogne I*, Paris : Éditions du Centre national de la recherche scientifique.
- TAVERDET, Gérard.(1977). *Atlas Linguistique et ethnographique de la Bourgogne II*, Paris :Éditions du Centre national de la recherche scientifique.
- TAVERDET, Gérard.(1980). *Atlas Linguistique et ethnographique de la Bourgogne III*, Paris : Éditions du Centre national de la recherche scientifique.
- TAVERDET, Gérard. et Navette-Taverdet, D. (1990). *Dictionnaire du français régional de Bourgogne*, Paris : Éditions.
- ZINK, Gaston. (1991). *Phonétique historique du français, 3^e édition, 1^{re} édition mise à jour 1986*, Paris : Presses Universitaires de France.
- 伊藤 玲子 (2020), 「20 世紀中期のブルゴーニュ地方モルヴェンの音声特徴と音声分布の分析 -2 つの言語地図を用いて-」, 『ふらんぼー』45, 東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会, 87-105.
- 大賀 正喜ほか (1988), 『小学館ロベール 仏和大辞典』, 東京 : 小学館.
- FEW = WARTBURG, Walther von (1922-2002). *Französisches Etymologisches Wörterbuch. Eine Darstellung des galloromanischen Sprachschatzes (Vols. 1-25)*. Bonn/ Heidelberg/ Leipzig-Berlin/ Basel : Klopp/ Winter/ Teubner/ Zbinden. <https://apps.atilf.fr/lecteurFEW/> (最終閲覧日 2020 年 4 月 29 日)
- Atlas Linguistique de la France (ALF)* = GILLIERON, Jules. et EDMONT, Edmond. (1902-1910), <http://lig-tdcge.imag.fr/cartodialect5/#/> (最終閲覧日 2020 年 8 月 31 日)